

「太宰治が生きたまち・三鷹」が伝えていくもの

新春対談

今年は 作家・太宰治の生誕100年という記念の年です。太宰治は、昭和14（1939）年9月から亡くなる昭和23（1948）年6月まで三鷹に暮らし、この地で数々の珠玉の名作を生み出しました。三鷹市がその業績を顕彰して行う事業の一つ、太宰治賞の贈呈式に毎年ご出席いただいているのが、太宰治の長女として三鷹に生まれた、津島園子さん。お父様の思い出や三鷹での生活、三鷹市の文化事業などについて、市長を相手になごやかに語っていただきます。

父・太宰治と過ごした三鷹の思い出

清原 津島さんには、毎年、太宰治賞の贈呈式で、受賞者に花束をお渡しいただいています。賞状も貰ったんですが、やはり太宰治さんの実の娘さんに祝福されるということが、受賞者にとっては何よりうれしいことではないかと思っています。

津島 いざいざ、毎年お招きくださって、父ゆかりの賞の栄えある場に臨むことができて、とてもうれしく思っております。

清原 津島さんと三鷹市との縁は、太宰治賞に始まったわけではなくて、お父様が生前も三鷹ですわね。

津島 ええ、昭和14（1939）年に結婚した父は、同年に下連雀に越しま

てまいりまして、16（1941）年に長女の私が生まれました。それまで不安定な生活をしてきた父ですが、ようやく仕事も私生活も安定しつつあった時期だったと思います。そんなときに子どもを授かって、太宰にしてみれば本当によい場所だったのではないのでしょうか。三鷹での健康的で家庭的な暮らしの中で、父は次々と明るい作品を書いていま



清原慶子市長
Keiko Kiyohara

昭和26（1951）年生まれ。慶応義塾大学、同大学院で学んだ後、ルーテル学院大学文学部助教授・教授、東京工科大学メディア学部教授・学部長を経て、平成15（2003）年、第6代三鷹市長に就任（現在2期目）。社会保障審議会少子化対策特別部会委員など国の審議会委員を数多く務める。市民参加と協働を地域主権の原動力とした市政運営を進め、三鷹の自然・文化・歴史を大切に、太宰治文学サロンなどを生かした魅力ある三鷹の創造に取り組んでいる。

清原 当時は、ちょうど戦争もあって大変な時期だったと思いますが、三鷹で過ごされた幼少時代には、どんな思い出がありますか。

津島 あのころはまだ道路が舗装されていなくて、雨が降るとぬかるんでいましたから、いつもゴム長靴を履いて遊んでいたような思い出があります。家族そろってわが家の庭で撮った写真が残っていますが、その撮影のときも家の近くでゴム長靴を履いて遊んでいて、「写真を撮るからいらっしやい」と呼ばれて父や母のもとへ駆けつけたように記憶しています。

父の死、そして生涯の趣味との出会い

清原 一家族のことで、ほかにとんない思い出がありますか。

津島 食糧難の時代でもありましたので、わが家で鶏を飼っていました。

清原 昭和23（1948）年6月に父が亡くなりますが、私はその年の4月に第四小学校に入学しています。入学式は4月5日でしたが、この日に

「金の出入りを細かく書いてくるように」との指示があったので、5日の私の入学式の帰りに母が武蔵野税務署に寄って再提出しているんです。太宰にとれくらい収入があるのか、どれくらい使っているのか、まったく知らされていない母は、当時いろいろ大変な思いをしたようです。母のそんな苦労も知らず、通い始めた学校が楽しくてしかたのない私は、毎日うきうきした気持ちで通っておりました。

清原 興味深いエピソードですわね。しかし、お父様が早くに亡くなられてお母様はもろんなこと、津島さんも大きく生活が変わってしまったのではないですか。

津島 私のほかに、弟、妹の3人の子を抱えて生活が大変だったこと、その年の12月に三鷹を離れて文京区の母の弟の家に世話になることになりました。

清原 そうですか。それは、一家族の皆様も苦労されたでしょうね。

津島 でも、私にとっては楽しい出会いもありました。今も趣味として親



三鷹の自宅縁側にて。長女（園子さん）、次女（里子さん）と太宰。昭和23（1948）年4月。



（上）津島園子さんの油絵作品「紅花白花」。身近に四季を感じることでできる花は津島さんの好きな画題のひとつ。
（中）清原市長の案内で文学サロンをご覧になる津島園子さん。年譜を前に往時の三鷹の様子に話が弾むひととき。
（下）昨年11月22日から12月21日まで開催された没後60年記念展。訪れた人は落ち着いた雰囲気の中で太宰文学の世界に浸った。



清原 一趣味といえは、津島さんは絵画も盛んに描いていらつしやるそうですね。

津島 結婚後10年位経って、太宰の生まれ故郷である青森のご婦人たちのグループに入って、油絵を描き始めました。徐々に自らの展覧会も開催にも出るようになって、最近では青森市のタウン誌の表紙用に2年間、油絵を描いていました。

しんでいるピアノです。母の妹で私の叔母、愛子さんは、私が三鷹の家で生まれたときから、いつも親子のそばにいて、身の回りの世話をしたり、たくさん私の写真を撮ってくれました。その叔母が、太宰の亡くなる3カ月前に病死してしまい、母は悲しみにくれます。ピアノが大好きだった叔母の思い出に、母の強い希望で、私はピアノを習い始めました。私は母の妹を想う気持ちを裏切り、本格的にピアニストを目指すほどには上達しませんでした。

清原 作品を拝見すると、本当に素晴らしいですね。絵の才能というのはお母様譲りなのでしょうか。太宰さ

太宰治文学サロンへの期待

清原 さて、昨年は、太宰治没後60年ということで、その業績を顕彰する事業をスタートさせました。3月に太宰治文学サロンをオープン。11月から12月にかけては、太宰治没後60年記念展を開催しました。文学サロンは、太宰さんも通われていた下連雀の酒屋さんの跡地に開設したもので、オープンから4カ月足らずで1万人ものお客様にお越しいただき、太宰文学の根強い人気に改めて驚いている次第です。

太宰文学の素晴らしさを伝える事業を

清原 太宰治文学サロンでは、太宰ゆかりの資料を、定期的に交換しながら展示なさっているようですね。このサロンは、まさに太宰ゆかりの地にあるということで大きな意味がありますし、父の文学を愛してくださる全国の方々にとっての文学通りのサロンとして、今後ますます発展していったほしいですね。

清原 これまでのお話に出ましたように、三鷹市では、太宰治賞や太宰治文学サロンを設けたり、記念展を開催したり、また、三鷹市を訪れる太宰ファンのみなさんのために、ゆかりの場所を紹介する案内板を設置するなど、太宰治ゆかりのまちとして積極的に文化事業を行っています。さらに、太宰さんの生誕の地である青森県の旧金木町が合併した五所川原市との連携を深めるための活動も

清原 私は、文学というのは、時を超えて永遠に生き続けるものだと思っています。特に、太宰文学は、人間の存在そのものに真摯に向き合った文学であり、時代も、国境も、民族も超えて共感しうる真理を描いています。その素晴らしい財産を、「太宰治が生きたまち・三鷹」としては、これからも永く顕彰し、また広く伝えていきたいと思っています。本日は、どうもありがとうございました。



太宰治文学サロン
昨年3月1日に、短編「十二月八日」にも店名が登場する三鷹駅近くの伊勢元酒店跡のビルの1階に開館。太宰ファンの交流の場にもなっている。下連雀3-16-14グランジャルダン三鷹1階／☎26-9150／月曜日休館（月曜日が祝日の場合は開館し、翌日と翌々日が休館。新年は1月6日から開館）／午前10時～午後5時30分／入館無料



津島園子さん
Sonoko Tsushima

昭和16（1941）年、三鷹町下連雀に、作家・太宰治（本名・津島修治）と妻・美知子の長女として生まれる。三鷹には、太宰が亡くなる昭和23（1948）年まで暮らす。幼いころから親しんだピアノ演奏を今も趣味とするほか、結婚後に本格的に始めた油絵では、グループ展や、東京銀座、青森市での個展も開催している。これまで、太宰治賞や太宰治展などをはじめとする太宰治関連のさまざまな事業で三鷹市にご協力いただき、夫は、衆議院議員の津島雄二さん。